

シンポジウム「言葉と倫理の諸問題 ～ 応用言語哲学の展開を踏まえつつ」開催趣旨  
佐藤岳詩（専修大学）、佐々木拓（金沢大学）

20世紀初頭の言語論的転回以来、哲学や倫理学あるいは思考と言語、そして行為が深い関係にあることは、よく知られた事実となり、それにともなって様々な研究が行われてきた。そして近年、応用言語哲学の名の下に、私たちの言語使用と実践の問題を結びつけて考える新しい動きが注目されている。2022年に出版されたハーマン・カペレンとジョシュ・ディーバー著『バッド・ランゲージ』（勁草書房 2022）の訳者でもある言語哲学者の藤川直也によれば、こうした考え方はこれまでに展開されてきた言語行為論、概念工学、フェミニスト言語哲学、意味論といった諸分野の研究が一つの学問分野としてまとまる中で2020年頃から生まれてきた新機軸であるという。

この分野の従来の言語哲学との違いの一つは、それが社会的、法的、政治的、倫理的な課題と強く結びついているということにある。たとえば、嘘をつくという言語行為は個人と個人の関係への影響はもとより、権力者によるプロパガンダ、特定の集団を貶めるヘイトスピーチ、SNS上での匿名の不特定多数による、あるいは不特定多数に向けられた誹謗中傷という仕方で行われた場合、広範な影響力を持って社会的・倫理的問題を引き起こす。2024年に出版された *Oxford Handbook of Applied Philosophy of Language* (Oxford university Press 2024) において、その編者である L. アンダーソンと E. ルポアは、人種、ジェンダー、政治といったものを取りまく課題の緊急性が、分析哲学者がそういったトピックを論じることを必要としたと述べる。

だが、同時にアンダーソンとルポアは、応用言語哲学の射程は言語の使用に限定されない、広いものであり得ると述べる。明示的には言葉ではないものを用いて何かを伝えること、あえて言葉にしないことで何かを表すこともまた、応用言語哲学の主題となり得るのである。同論集には「地図」に関する論文が二編収録されているが、同様に芸術や各種のテクノロジー、人工知能や生成 AI など、言語的なものの使用や不使用に実践的なインパクトをもつ事柄すべてを応用言語哲学の問題として論じることが可能だろう。

応用言語哲学は、日常的な他者との関わりから社会運動に至るまで、私たちが人と接する際に言葉が果たしている役割がいかに大きいかに改めて光を当てることだろう。言葉は、肯定的に使われれば誰かを助け、励まし、力を与える一方で、同じ言葉が否定的に使われることで聞き手の尊厳そのものを脅かすこともありうる。この当たり前の観点から、これまで哲学者たちが論じてきた意味論や言語行為論などの議論も参照することで、喫緊の倫理的・実践的な事柄について、何か新しい見方をもたらすことができないだろうか。

しかし他方で、言葉に囚われすぎることによって生じる問題もあるかもしれない。何もかもを言葉で捉えようとする、世界を過剰に言葉で埋め尽くそうとする態度は、本来、言葉にできないはずのものを私たちの実践から排除し、私たちの生に困難さをもたらしてしまっているかもしれない。倫理学は、そうした言葉にはできない何かをも扱う、より豊かなものでなければならないのではないか。

本シンポジウムでは、言語使用の裏表となる、この2つの問いを扱いたい。そこで、広い応用言語哲学的関心から言葉と倫理の諸問題の関係を模索するために、三人の専門家にご提題いただく。

一人目は、和泉悠氏（南山大学）である。和泉氏には、本シンポジウムでは、「悪口の起源-人類の社会性と進化的ミスマッチ」という題で、悪口という言語行為の本質について提題いただく。和泉氏の議論は、もはや私たちの日常となっているにもかかわらず哲学的考察が不十分なインターネット上でのコミュニケーションにも展開される。テクノロジーを介した攻撃的な言語使用の考察を通じて、日常的な言語使用の本性とその問題点について応用言語哲学的な議論をお話しいただく。

二人目の登壇者は、小田切建太郎会員（熊本学園大学）である。小田切会員には「人間ともの——言葉と倫理の余白に」という主題で、むしろ、言葉と言葉の間で取りこぼされる〈もの〉について、和辻哲郎をはじめとした日本思想の観点を踏まえながら論じていただく。認識論的転回から言語論的転回を経て哲学者は言葉によって世界を把握する姿勢を強めてきた。が、この潮流から一旦足を引いてその姿勢を批判的に考察することも応用言語哲学の役割のひとつだろう。小田切会員には応用言語哲学のもうひとつの側面として、人間を〈こと〉（ないし言葉）の領域に押し込めることで失われうるものについて検討していただく。

三人目の登壇者は、堀田義太郎会員（東京理科大学）である。堀田会員には「抑圧の構成要素としての差別の体系性——差別発言の考察から差別論へ」という題でご提題をいただく。ここでは蔑称の使用やヘイトスピーチといった言語活動の考察を通じて、差別という社会問題に対する考察を深めることを目指す。その際、発話がなされる「文脈」や「推論」に注目することで、明示的な差別発言と明示的な発話をともなわない差別の両方について考えるための筋道を提示していただく。差別の解消は私たちにとっての喫緊の社会的課題であるが、堀田会員の提題を通じて応用言語哲学の観点からの取り組みを議論したい。

以上のように、本シンポジウムでは、多角的な観点から倫理と言葉の関係について再考する。それを通じて、実践的問題について新たな視座を見いだすこと、そしてそれらを踏まえたときに、倫理やそれを扱う学がどのようにあるべきかを、会員諸氏とともに考えることを目指す。